

弾性圧迫ストッキングの足底滑り止めドットの効果

黒岩 政之, 阪井 茉有子, 大塚 智久, 西澤 義之,
杉村 憲亮, 永井 亜依, 山本 真也

北里大学医学部麻酔科学

背景: 弾性ストッキング (ECS) は下肢のうっ血を防ぐために着用されるが, 素材が化学繊維のため滑りやすく転倒のリスクとなる。そこで我々は滑り止め加工された3種類ECSを設計し, それぞれの滑りにくさを裸足モデルと比較した。

方法: シリコン樹脂で点状の滑り止め加工をした異なる3タイプの足底形状を作成 (タイプA: ECSの爪先側に滑り止め加工, タイプB: ECSの踵側に滑り止め加工, タイプC: つま先が開いていて踵側に滑り止め加工)。滑りにくさの検証は, 重さ500gのマネキン足に各ECS足底タイプを着用させ, それを傾斜台にのせて水平から傾斜をつけ足模型が100%以上移動した傾斜角 (AS) を測定し, 5回の平均値を算出。前後両方向とも計測し, 裸足モデル (マネキン足のみ) と比較した。

結果: タイプAは裸足に比べてASが有意に低く (前方48.2°対60°, 後方41.8°対57.2°, $P < 0.01$), タイプBも同様にASが低かった (前方36.2°対60°, 後方51.2°対57.2°, $P < 0.01$)。タイプCのASは, いずれの方向にも裸足モデルとの有意差はなかった (前方58.6°対60°, 後方53.8°対57.2°, $P > 0.05$)。

結論: つま先が開いていて踵側に滑り止め加工したECSは, 裸足モデルと同じくらい滑りにくく, ECSを装着しても転倒しにくい可能性が示唆された。

Key words: 弾性圧迫ストッキング, 転倒事故, 滑り止め加工, 裸足, つま先開き

クリニックにおけるめまい外来のまとめ

落合 敦^{1,2}

¹北里大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学

²本郷脳神経外科

目的: めまいの臨床統計に関する報告は多いが, そのほとんどは大学病院におけるものであり, クリニックにおける報告は少ない。また, その疾患構成は施設の規模により違いが見られることが指摘されている。そこで当クリニックにおいて最近3年間に取り扱った初診患者1,036名についてまとめた。

方法: めまい患者への診察は, 問診, 一般耳鼻咽喉科診察, 一般神経学的検査, 小脳機能検査, 眼球運動検査, 純音聴力検査, 赤外線フレンツェル眼鏡装用下での各種眼振検査, 足踏み検査, 重心動揺検査を基本とした。その他, 必要に応じてシェロンテスト, 頭部MRI/MRAを追加した。

結果: 初診患者数は年々増加していた。性別は女性が多く, 69%を占めていた。男女ともに60代にピークを認め, 60代までは年代の上昇とともに患者数は増加し, 60代を過ぎると年代の上昇とともに患者数は減少していた。診断名を末梢前庭性障害群, 中枢性障害群, 全身性疾患群, 症状からの診断群の4群に大別したところ, それらの比率は末梢前庭性障害群521名 (50.3%), 中枢性障害群382名 (36.9%), 全身性疾患群42名 (4.1%), 症状からの診断群91名 (8.8%)であった。

結論: 諸家の報告と同様, 末梢前庭性障害群が最も多かったが, 中枢性障害群が諸家の報告よりも多かった。これは当クリニックが脳神経外科クリニックであり, 諸家の報告はすべて耳鼻咽喉科からの報告であるため, その疾患構成は施設の規模のみならず形態によっても違いが見られることが示唆された。

Key words: めまい, 耳鼻咽喉科, クリニック, 中枢性障害, 年齢

単施設後方視的コホート研究による全身性エリテマトーデス患者における化学発光酵素免疫法を用いた検出された抗Smith抗体の臨床的意義

有沼 良幸¹, 廣畑 俊成^{1,2}, 諫山 拓也³, 長谷川 靖浩¹, 村松 匠¹,
近藤 惇一¹, 金山 芳郎¹, 松枝 佑¹, 山岡 邦宏¹

¹北里大学医学部膠原病・感染内科学

²信原病院

³株式会社 医学生物学研究所

背景: 抗Smith抗体 (抗Sm抗体) は全身性エリテマトーデス (SLE) 患者で検出される疾患特異的自己抗体での1つである。抗Sm抗体の検出には化学発光酵素免疫 (CLEIA) 法は簡便な検出法であるが全身性エリテマトーデス患者における臨床的意義については完全には明らかとなっていない。本研究ではまずSLE患者におけるCLEIAによる抗Sm抗の有用性を検討し、SLEの臨床的特徴と抗Sm抗体との関係性を明らかにすることが目的である。

方法: 抗Sm抗体をCLEIA法であるSTACIA MEBLux™にて測定した。127人の全身性エリテマトーデス患者および疾患コントロール患者140人の保存血清を用いて抗Sm抗体のSLE検出に対する感度・特異度を検討した。臨床データは診療録より抽出し後ろ向きに解析抗Sm抗体との関係性を検討した。

結果: CLEIA法による抗Sm抗体価は従来法である蛍光酵素免疫 (FEIA) 法と有意に相関した ($r = 0.57$, $p < 0.01$)。CLEIA法によるSLE検出は受信者動作特性曲線より求めたthe area under curve (AUC) は0.860, 95%信頼区間 (CI) は0.813~0.906, 感度, 特異度はそれぞれ44.9%, 99.3%であり, FEIA法では感度50.0%, 特異度92.3%, AUC 0.740, 95%CI 0.674~0.805だった。CLEIA法で抗Sm抗体が陽性となったSLE患者は陰性の患者に対し心膜炎 (オッズ比2.66, $p = 0.054$, 95%信頼区間 1.01~7.58), 関節炎 (オッズ比1.95, $p = 0.15$, 95%信頼区間 0.80~4.93), CRP高値 (オッズ比5.65, $p = 0.054$, 95%信頼区間 0.60~74.5) が高いオッズ比を与え, 補体低値においては有意なリスク (オッズ比2.45, $p = 0.037$, 95%信頼区間 1.08~5.90) であった。

結論: CLEIA法による抗Sm抗体の測定は全般的に十分なSLE検出力を持っている。SLE患者における抗Sm抗体陽性は関節炎や心膜炎のような主に自然免疫の活性化に影響を与え, 局所炎症を来す病態の発症に寄与している可能性がある。

Key words: 全身性エリテマトーデス, 自己抗体, 抗Smith抗体

成人吃音患者における精神科的併存疾患について

金 樹英¹, 佐久間 隆介¹, 酒井 奈緒美^{2,3}, 北條 具人^{2,4}, 森 浩一², 生地 新⁵

¹国立障害者リハビリテーションセンター児童精神科

²国立障害者リハビリテーションセンター耳鼻咽喉科

³国立障害者リハビリテーションセンター研究所

⁴国立障害者リハビリテーションセンター言語聴覚療法部

⁵北里大学大学院医療系研究科発達精神医学

目的: 成人吃音患者においてどのような精神科的併存疾患があるのか調査し、併存疾患によるプロフィールの違いを検討する。

方法: 吃音の治療を求めた成人吃音外来を初診で訪れた成人吃音患者について児童精神科医が併存精神科疾患の診断を行い、疾患群にわけた。自己記入式質問紙 (PHQ-9, LSAS-J, エリクソンS-24) による心理学的指標と、背景因子について違いがあるか群間で比較を行った。

結果: 195人の成人吃音患者 (18~64歳) のうち52.3%になんらかの精神科疾患が認められた。うつ病と社会不安障害を含む不安障害をあわせて29.2%、自閉スペクトラム障害 (ASD) は26.6%、その他の精神障害は13.3%、2つ以上の精神科疾患の診断が13.3%にみられた。169名の患者を、吃音のみ (SO)、抑うつ・神経症 (D/N)、ASDの3つの併存症による群に分類し、群間比較を行った。PHQ-9とエリクソンS-24, LSAS-Jの平均点にはどれも有意な違いがみられた。背景因子では、吃音重症度や年齢には差がみられなかったが、最終学歴と現在の就労状況には差がみられた。

結論: 成人吃音患者において精神疾患が高率に併存することは知られているが、特にASDも高率にある可能性が示唆された。ASDを併存する場合には適した対応が必要となるため、成人吃音患者の治療にあたって留意する必要がある。

Key words: 吃音, 併存症, 自閉症スペクトラム障害, 社会不安, PHQ-9